AOMORISIX 合同学修研究発表会　ポスター発表リスト

no	学校名	チーム名	発表タイトル	アピールポイント
1	青森中央学院大学	Team A	行政機関における公益通報制度と職員の病気休職の関係について	近年、日常生活で公益通報制度を聞く機会が増え、多くの人々が関心を持っている。また、行政職員の「心身の故障」による休職も増加してきている。今回の研究では、公益通報制度と行政職員の「心身の故障」による休職との関係を調べる。公益通報が多いことは、公益通報しやすい環境で心身の故障が少なくなることにつながるのか、それとも単純に公益通報が多いから悪環境で心身の故障が多いのかについて分析する。
2	青森中央学院大学	Team B	教育機関の充実と人口の増減について	2019年度の青森県の高校卒業者の進路状況を見ると、全体の4割が、県外での進学や就職を選択 しており、県内を選択する人の割合を上回っている。県外の大学へ進学する理由の上位が志望する学部や学科があるからである。したがって、教育機関が充実していれば地元に残る人が増え、人口減少を抑えられる可能性がある。本研究では、地域の高等教育機関の数と人口の増減率について分析する。
3	青森中央学院大学	Team C	地方自治体の財政状況と文化事業について	文化事業は他の行政分野と比較して、その充実が後回しにされるのではないか。自治体の財政状況が逼迫する中、このような傾向が顕著になっている可能性がある。本研究では青森県の財政状況と文化事業をほかの県と比較し、一般財政と文化事業の関連性を明らかにする。さらに、文化事業の確立は何によって左右されるのか考える。本研究では特に文化施設の維持・充実という点について議論する。
4	青森明の星短期大学	キャリアビジネスコース２年	プロジェクト演習 実施報告	キャリアビジネスコース２年の科目「プロジェクト演習」において、グループに分かれて地元の身近なことをテーマとして取り上げ、調査、発表を行いました。勉強カフェ：短大周辺の商店街に、短大生や周囲の学生に多く利用してもらい、地元活性化につなげる提案を行いました。津軽弁カフェ：青森を訪れる観光客に青森の資源である津軽弁を取り入れた津軽弁カフェを利用してもらい観光客に青森の良さを訛りで伝える提案を行いました。
5	青森明の星短期大学	櫻本ゼミ①	現代社会における欠乏欲求のゆくえー自己実現傾向から「推し」の存在意義ー	2021年の新語・流行語大賞にノミネートされた「推し活」という言葉を契機に, 身近な存在となった「推し」が大学生の自己実現傾向にもたらす影響を調査した。結果,「推し」は生きる活力をもたらすことが示唆された反面, 理想とする「推し」に傾倒する学生の様相が示唆された。「推し」にベクトルが向いた結果, 依存に陥る可能性が示唆されたことから,「自分が自分の推し」になることが自分らしく生きることに繋がると結論づけた。
6	青森明の星短期大学	櫻本ゼミ②	周囲に囚われる私たち - 過剰適応が人生に対する満足感に及ぼす影響について -	青年期における過剰適応状態はどのような要因によって生じるのか、また、人生に対する満足感へ及ぼす影響について調査を行った。結果、過剰適応傾向がある群も、そうではない群も、双方共に周囲からの目や評価が気になりながら過ごしている一方で、人生に対する満足感が低い者は「自己不全感」が高い傾向にあることが明らかとなった。さらに、青年期特有の閉鎖的な空間である学校環境が過剰適応に及ぼす影響についても明示された。
7	青森中央学院大学	村田　日菜乃	聖地巡礼と経済効果について	・研究の背景…日本国内におけるアニメ市場では、2兆9277億円と、2022年に過去最高を更新した。 ・研究の目的…聖地巡礼を活用した観光振興・地域振興の課題と、地域への影響・効果を分析する。 ・先行研究…「らき☆すた」参拝客34万人増加。「ラブライブ！サンシャイン！」ふるさと納税が大幅に増加。 ・仮説…聖地巡礼をする人々の増加により、地域の経済効果が上がり、地域振興に繋がるのではないか。
8	青森中央短期大学	清澤研究室	働き盛り世代の男性へ向けた健康意識向上プログラムの提案～料理教室参加者を介した「ながら運動」啓発の試み～	青森県では、40～50代の働き盛り世代の男性の死亡率が高いことが問題とされており、運動習慣者の増加が求められている。そこで本研究では、働き盛り世代男性への健康や運動の意識調査と料理教室での「ながら運動」啓発の取り組みを行った。仕事や家庭で忙しく時間的・精神的ゆとりがない働き盛り世代でもデスクワークの合間などに簡単にできる、料理教室参加者を介した「ながら運動」啓発プログラムを提案した。
9	青森大学	ソフトウェア情報学部 角田研究室 奥﨑弥	Unityによるプログラミング教育	プログラミング教育が必修化された現代で楽しくプログラミングを学べる方法を模索した。そこで、Unityを使用してゲームを作成し高校生を対象に授業を行った。プログラミング教育を行うことでプログラミングやITにどのようなイメージを持ったか、また授業実施後にはどのくらい理解度が上がるか検証した。
10	青森大学	ソフトウェア情報学部 角田研究室 吉村航太	居眠り防止システムの開発	本研究では、ドライバーの居眠り運転を防止するシステムを開発した。顔検出技術を用いて眠気を判定し、危険時に警告音で通知する仕組みを実装した。リアルタイム性と精度の向上に重点を置き、安全運転支援への貢献を目指す。
11	青森大学	ソフトウェア情報学部 角田研究室 古川弥音	緑表紙教科書から学ぶ算術	算数の教科書として優秀である尋常小学で使用されていた緑表紙教科書について、どのような点が優秀である教科書か、現代とはどのような違いがあるのかを調べている。また、この緑表紙教科書を活用し、算数や数学に対して苦手意識をもっている人でも数学的思考力や論理手思考力を育むことのできるゲーム開発をしている。
12	青森大学	ソフトウェア情報学部 角田研究室 藤本伊織	ノーコードでのアプリケーション開発	Flutter Flowを使用したノーコードでのアプリ開発を行った。大学生のアルバイト向けに特化したアプリを開発、Google Calendarと連携することで、扶養控除や労働時間の管理を簡素化する。アルバイトの勤務状況や時間を自動でトラッキングし、時給計算や労働時間の把握をサポートする機能を提供する。
13	青森大学	櫛引ゼミA	人とペットの災害をどう防ぐか ー防災教育の可能性・青森県内の事例からー	災害時にペットをどうサポートするか、対策が立ち遅れ気味の青森県の現状と、望ましい対策の姿を、関係者へのヒアリングやアンケートから探る。
14	青森大学	櫛引ゼミB	マラソン大会は地域の観光振興・魅力発信につながっているのか～青森県の実例をめぐって～	県内各地で行われているマラソン大会は観光振興と地域の魅力発信にどうつながっているのか。事例検討やヒアリング、ウォーキング大会との対比から考える。
15	青森大学	櫛引ゼミC	ふるさと・北秋田市阿仁のこれからのまちづくり　～住民の声から探る現状と課題～	人口減少と高齢化が進む北秋田市阿仁地区を対象に、地域の将来を探る人々へのヒアリングなどを通じて、現状を浮き彫りにするとともに、課題と可能性を検討する。
16	青森大学	櫛引ゼミD	青森県の農業協同組合の使命と課題 ～農業高校出身者の視点からの考察～	農協（JA）の歴史を振り返りながら、JA青森が抱える課題について、筆者の体験を中心に検討する。
17	青森大学	櫛引ゼミE	津軽線の沿線振興と学生の役割～豪雨災害の記録とマップ制作を通じて～	JR津軽線（青森ー三厩間）は2022年夏の豪雨被害により、蟹田以北の鉄道を廃止して、バスとデマンド型タクシーに転換することが決まった。フィールドワークとヒアリングに基づき、経緯の検証と今後の展望を試みる。
18	青森大学	櫛引ゼミF	青森大学と幸畑団地の連携に見るまちづくりの未来ーシビックプライドが持つ可能性をめぐってー	青森大学と幸畑団地の連携に至る経緯と背景、意義をめぐり、関係者のヒアリングを実施するとともに、連携がもたらした将来への可能性を、シビックプライドの観点から検討する。
19	青森大学	社会調査実習A	幸畑団地発・年代別「家の形」カタログ	幸畑団地に立地する「家」の外観から、建築年代を簡易的に判断できる「家の形カタログ」をつくり、実用性を確認する

no	学校名	チーム名	発表タイトル	アピールポイント
20	青森大学	社会調査実習B	移住者に聞く・幸畑団地を選んだ理由	幸畑団地は近年、地区によって移住者が増加している。幸畑団地を選んだ人々に、その理由や背景、今後への抱負を聞く。
21	青森大学	社会調査実習C	公園の管理とその背景	幸畑団地に立地する公園の特徴を把握するとともに、より望ましい管理・活用の在り方を、関係者へのヒアリングとフィールドワークから考える。
22	青森大学	地域社会調査法A	本当に上手な運転って何？～幸畑地区の運転、交通事情のデータから読み取る～	「本当に上手な運転とは？」をテーマに、警察やJAF青森へのヒアリング、幸畑地区住民を対象としたアンケート結果を基に現状と課題を考える。
23	青森大学	地域社会調査法B	公園について～利用者の行動と意義～	幸畑団地地区のフィールドワークや青森大学生へのアンケートを通じて、公園利用の現状、利用促進策を探る。
24	青森大学	地域社会調査法C	幸畑地区の自販機革命～キャッシュレス化への進化と可能性～	幸畑団地一円の自動販売機の分布およびキャシュレス化の進展を調査し、特徴を把握、考察する。
25	青森大学	地域社会調査法D	障がい者と公共交通機関	視覚障害や聴覚障害を抱える人々にとって、青森市内の公共交通機関の使い勝手はどうか。青い森鉄道を題材に、ヒアリングやフィールドワークを通じて検討する。
26	青森大学	地域社会調査法E	防災と青森市総合体育館	今年オープンした青森市総合体育館が災害時にどう活用されるのか、また、どのような課題を抱えているのか。青森市が直面すると予想される災害を念頭に、他地域との比較から検討する。
27	青森大学	緑化カフェ	緑化カフェからまちづくりと温暖化対策へ	「緑化カフェ」を青森市中心部につくり、若者の居場所づくりを図るとともに、地球温暖化対策などを語り合うプロジェクトのコンセプトを紹介
28	青森大学	青森大学有機合成化学研究室１	水酸基を有したビニルスルホニウム塩の合成	スルホニウム塩は有用な機能性材料として知られている。これまでにビニルスルホニウム塩の合成方法の報告例はあるが、水酸基含有ビニルスルホニウム塩の合成は報告例が少ない。最近我々は、環状ジケトン由来の水酸基を持つビニルヨードニウム塩にスルフィドを反応させると、ビニルスルホニウム塩が得られることを発見している。本発表では、様々な基質を利用した水酸基含有ビニルスルホニウム塩の合成を中心に発表する。
29	青森大学	青森大学有機合成化学研究室2	Arylbenziodoxaboroleとスルホキシドとの反応開発	アリールスルホニウム塩は生理活性物質や機能性分子化合物などに利用でき、合成法は数多く知られている。一方、フェノール性水酸基を有したスルホニウム塩化合物の合成法について報告例は少ない。最近、我々はArylbenziodoxaboroleにスルホキシドを加えると、アリールスルホニウム塩が得られることを見出している。また、アリール部位にフェノール基が導入されていることも確認している。今回これら化合物の効率的合成法を見出したので、報告する。
30	青森中央学院大学	山本ゼミ　経済分析班	地域経済の成長と高齢者の活躍	本研究の問題意識は大きく２つある。第１は、高齢者の退職年齢を5歳程度延ばすことによってどの程度の経済成長を確保することができるのか、ということ。第２は、就労継続となる方々にはどのようなケアが必要なのかということである。結論として、高齢者の退職年齢を5歳程度上げるに際し、就労継続者の生きがいや能力を尊重したケアを推進することで無理なく就業を継続してもらい、最大で約5.47%の経済成長率を見込むことができる。
31	青森中央学院大学	畠山・山本ゼミナール	スポーツが体に与える影響	青森県では三大疾病による死亡率が全国的に見ても極めて高い。また、2024年10月に国スポが開催されることから、スポーツを通じて健全な心と体を育むことが、健康や寿命にいかなる効果を与えるのかを都道府県データによって分析し、改善策を検討する。
32	青森中央学院大学	品川和子	自動車運転における自己評価と事故率の関連性	交通事故は、さまざまな要素が起因となって起こる。車両や道路状況などの外的要因に加えて、運転者の心理や行動などの内的要因の分析が必要である。そこで、事故要因を構造的に明らかにし、内的要因の観点から交通安全意識の在り方を検討するため、自動車運転における自己評価と事故発生率を基に分析を行った。
33	青森中央学院大学	クアウォーキングを支えようサークル	「クアウォーキングを支えようサークル」活動実践報告	本サークルは、青森市浅虫温泉地域で実施されている「ドイツ式健康ウォーキング（クアウォーキング）」を、安心・安全に行うためのサポート活動を行っている。実施主体である青森クアガイド協会が新体制になったことにより、ウォーキングの前にQOL健診項目を取り入れた健康チェックの体験や、浅虫の新たな魅力を探索しながらのウォーキング活動が行われた。それらを中心に、2024年度の活動と学びについて報告する。
34	北海道教育大学	石森ゼミ３期	多言語・複言語による異文化コミュニケーション	グローバル化が進む現代、様々な言語や文化を有する人々の接触が増大している。外国語教育においては、異文化コミュニケーション能力の育成が重要視され、近年、多言語・複言語活動への関心が高まっている。しかし、地方では、英語以外の外国語や言語の多様性を学ぶ機会は乏しい。この課題に対応するため、ゼミ活動として留学生と協力し、多言語・複言語活動を実施した。本発表では活動の成果や児童生徒の学びについて考察する。
35	函館大学	海のゴミアップサイクル	ゴミをアート作品～函館の釣りマップ	地域の海ゴミの回収及び啓蒙活動の周知。函館の有名観光地である赤レンガ倉庫の海辺や道にゴミが落ちていることに地域に住んでいる自身として危機感を感じ、海のゴミを回収し多くの人に知ってもらうため、別のものに作り替えるアップサイクルを実施しています。今回、海のゴミがたまりやすい区域の調査し、新たなアート作品作り（アップサイクル）を行うこと、また、これらの活動を通して、海のゴミについて考えてもらうきっかけとします。
36	函館大学	函館釣り班	道南の釣りマップ	“函館・道南地域の釣り”の現状・課題、情報の提供。地球温暖化による函館の海の変化を調べ、今後の魚種の変化、函館・道南の海についてのマップ作りを行います。
37	函館大学	サウナサークル	函館のサウナについて	今日において、サウナブームが全国で起きています。函館市内にはロウリュウ（フィンランド式サウナの入浴方法）が付属している温泉施設が多くあり、地元の人々や観光客に人気です。これらのサウナでは、北海道の自然を感じながら、リラックスできるサウナ体験ができます。私たちは函館市内におけるサウナ（施設）における課題を見つけその課題の解決方法を調査・研究し、発表します。、
38	青森中央短期大学	森山研究室	小学生を対象とした調理技術向上にむけた食育活動の実践	青森県の児童・生徒は肥満出現率が全国平均よりも高く、小学1年の時点で全国平均との差は2倍近くとなっている。先行研究では生涯にわたって望ましい生活習慣を営むためには子どものころからの調理体験が有効であると報告されている。そこで、本研究では小学生の親子を対象に料理講座を企画し、親子で調理を楽しむ機会を設けるとともに、調理に対しての子どもの成功体験を増やすこと目的とした食育活動の実践を行った。

no	学校名	チーム名	発表タイトル	アピールポイント
39	青森大学	総合経営学部１	青森大学サッカー部強化プラン	青森大学に在籍しながら現役プロサッカー選手として活動中だが、3年生迄、青森大学サッカー部に所属していた。弱小チームである青森大学サッカー部を強くする為の施策の研究をした。研究の手法としては、青森大学と競合する他大学チームをモデル校として、各指導者や部員へのアンケートやインタビューの実施と全試合結果の分析を行い、筆者自身のアマとプロでの競技体験も踏まえて、青森大学サッカー部の強化プランをまとめた。
40	青森大学	総合経営学部２	スポーツマーケティングに関する一考察 ～ブランデュー弘前FCの観客動員数を上げるには～	本研究では、このスポーツマーケティングの中でも、スポーツを利用したマーケティングや、“スポーツそのものをマーケティング”ではなく、有料の“観るプロスポーツ”に焦点化し、中でも、青森県弘前市を拠点とするブランデュー弘前ＦＣの事例を中心に、観客動員数増加の可能性について若干の考察を試みたものである。
41	青森大学	総合経営学部３	コンビニエンス・ストアの経営戦略	大学の講義で興味を持ち、コンビニエンスストアの経営戦略について研究しました。冒頭では、コンビニの歴史やシステムについて記載しております。次にコンビニ業界、主要チェーン店について分析し各社の比較を行い、それをもとに考察した内容を記載しております。最後に今後のコンビ業界がどのようになっていくのかを現状の分析をもとに考察し記載しています。
42	青森中央短期大学	前田美樹研究室	悪意がない言葉の怖さ	文献研究を主とし、言葉の機能、隠された意味、影響等の視点から「悪意がない言葉の怖さ」について考察した。また、青森中央短期大学幼児保育学科学生を対象とした言葉についてのアンケートを実施・結果分析し、その結果を関連づけて、善意のある言葉の危険性について明示した。 日常的に使用する言葉を独創的かつ多様な角度で捉え、言葉を通して思考することの重要性、自分の言葉に責任を持つことを問う研究である。